

西施と共に名わき役の「伍子胥」から書き始めたい。伍子胥(生年不詳～BC.484年)の話をするると後述のようにもう一人著名な人物・孫武が登場する。

伍は呉の人ではない。楚の人で代々楚の重臣の家柄であったが、平王の時のお家騒動で隣国の呉に逃れた。当時、呉王は5代目の王である「僚」であったが、公子である「光」が刺客を遣って暗殺し自分が王位に就き、「蘇州市・I」で書いた6代目王「闔閭」となった。その時伍子胥を側近に登用しついに將軍とさせた。伍子胥は闔閭が公子の時代からの懐刀であったのである。その目的は伍一族を追いやった楚に対して復讐するためであった。

その後、やはり齊国から呉に逃れてきた孫武(BC.535年?～没年不詳)は伍子胥の知遇を得た。非凡な才能を認めた伍子胥は、闔閭に孫武の登用を願い出た。あの有名な「孫子の兵法」を献上し、何度も登用を迫った。ついに闔閭は宮中で謁見し孫武の軍事の才を認め、BC.512年にいきなり將軍に登用した。この時のエピソードがあるが、長くなるので割愛する。彼は、孫武と共に闔閭を補佐し呉の国力充実に取り組んだのだ。

闔閭の命を受けた伍子胥は、富国強兵に務めたがそのうちの一つが前号で少し触れたように蘇州城の設計と築城である。この城は南北にやや長い長方形に区割りされ、そこに周囲25kmの城壁が築かれた。そして江南地方の随所に見られる運河を城壁を挟むように外濠、内濠に巡らせている。城壁の八か所には大きな城門が造られた。

蘇州城は日本で言う平城であるが、当時としては堅固な要塞であったと想像できる。現在は交通の邪魔となるからか、他都市と同様立



瑞光塔遠景(中国「百度」より転載)

派な城もほとんど取り壊されている。まことに残念なことである。ただほんのわずかであるが残っている、とも言えるところがある。それは城の南西角にある「盤門」である。ただしこれも現存するものは1351年、元の時代に再建されたものである。

盤門は八つの城門の一つであるが、門前の外城河という運河に架かっている「呉門橋」と盤門を挟んで反対側にある「瑞光塔」を合わせたものが「盤門三景」と言われ、観光客で賑わっている。周囲25kmの蘇

州城跡が今の蘇州市の中心であり、世界遺産である拙政園や獅子林などの庭園の多くはここ旧城内にある。

瑞光塔とは、あの魏・蜀・呉の三国時代(220年～280年)に呉の孫権が母の恩に報いるために禅寺を建立した際に建てられたという。現存している塔は1004年(北宋時代)に再建されたもので、7層で高さ53m余りの八角形の美しい姿を見せている。

日本には現在五重塔は各地にあるが6層以上の塔は私は見たことがない。中国ではたとえば杭

州の銭塘江沿いの「六和塔」は13層もあり、さすがにどっしりとして迫力がある。瑞光塔は7層ではあるが



瑞光塔遠景(中国「百度」より転載)

細長く矢を天に突き刺したようなイメージがある。

盤門と共に知られている(?)城門に「葑門^{ほうもん}」がある。この門は蘇州城の東にあった門である。葑門とは、「史記」にある「而シテ吾ガ眼ヲ抉リテ、呉ノ東門ノ上ニ懸ケヨ」とある門である。「眼」とは伍子胥の目玉である。この史記の記述は、ご存知の方も少なからずあると思うが、少し説明をしておきたい。



伍子胥と闔閭とは肝胆相照らす間柄と思われるが、闔閭の死後、王となった夫差とはソリが合わなかった。前号で書いたように夫差は越王・勾踐に殺された父の怨みを果たし、勾踐を捕えた。この時伍子胥は勾踐を処刑すべきだと迫ったが、夫差は彼の主張を受け入れなかった。その後も、「勾踐は苦い熊の胆を嘗めて呉への復讐を誓っている。今は面従しているが必ず呉に攻め寄せてくる」と何度も夫差に進言したが、夫差は彼の話信じようとせずこれといった対策も取らなかった。そしてついに讒言を取り入れ、伍子胥に剣を与え暗に自害を命じたのである。覚悟した彼は死に際に家族に対し、「自分の予言に間違いはない。私の死後、越が必ず呉を滅ぼすだろう。越軍が東門から攻め寄せてくるのを見るため、わが目玉をくりぬいて東門に懸けよ」と言って果てたのである。



伍子胥の性格はどうも楚人の典型のような気がする。厳格な性格というか、物事に対し妥協を許さぬ性格というか、ともかく激しい性格の人が多いようだ。古くは屈原も楚人であるし、現在、湖南省は革命家を輩出したが、そこは昔の楚の地の一部である。毛沢東、劉少奇、胡耀邦、華国鋒など挙げればきりがなく、楚人の気質を受け継いでいるように思える。

この伍子胥の記念館が盤門に近いところにある。伍相祠(伍相=伍子胥)である。伍子胥の坐像が置かれており、蘇州では当然英雄の扱いである。ところが面白いことに、越の国の都であった紹興市にある越王殿では完全な悪役扱いになっている

そうだ。いつか行って確かめてみたい。すこし長くなったが、以上で呉越戦争の主役、脇役の物語を終わりとしたい。

多くの日本人が蘇州と言えばまず訪れて見たいところは、寒山寺ではないかと思う。私もそうであった。私が初めて寒山寺を見たのは2003年である。寒山寺に対して私が描いたイメージは、有名な張継の「楓橋夜泊」や寒山寺という寺名などからの印象からかもしれないが、鄙びて落ち着いて周囲に溶け込むような寺であった。彼の生きた8世紀はそのような佇まいであったであろうが、現在は全く違っているとは分かりつつも私の気持ちはそれを期待していた。

門前に着いたとき、期待は当然裏切られ黄土色の高い塗り壁が圧倒的に目前に迫り、周囲を取り囲むように立っていた。おまけに平日なのに観光客でいっぱい境内に入っても騒がしいのには閉口した。静かに手を合わすどころではない。台湾には同期の人達と行ったことがあるが、中国大陸に足を踏み入れたのはこの2003年が初めてで、見るもの聞くものすべて珍しくどこに行っても自分のイメージと違うものばかりで戸惑ってしまった。

しかし、楓橋夜泊の碑の前に来たときはやはり感激した。ようやく夢が実現したのだと。日本人の多くがこの詩が好きなように私もとても好きである。境内の鐘楼で鐘を撞いた後、寒山寺の門を出て近くの土産物店で早速掛軸を購入した。私の家の床の間にはこの掛軸が掛かっており、これを見るたびに寒山寺を懐かしく思い出す。ここにその詩を掲げておきたい。



寒山寺全景(中国サイト、「最美中国」より転載)

楓橋夜泊

月落烏啼霜滿天
江楓漁火對愁眠
姑蘇*城外寒山寺
夜半鐘聲到客船

(*姑蘇は昔の蘇州の名称)

さて人の印象は様々で、寒山寺に対する印象についてある方の旅行記の中からご紹介したい。

実は私が住んでいる町田市の三輪緑山には‘わりり’会員であった“中根文子”さんがお住まいになっている。この方は実は10月でなんと百歳になられた。心よりのお祝いを申し上げたい。お元気で時折お話をさせていただいている。中根さんは旅がお好きで世界中をまわられ、それを旅行記「旅ごころ」として3冊上梓されている。この中で中根さんは昭和56年(1981年)、つまり67歳の時寒山寺を訪ねておられる。私が初めて行った時より20数年前のことである。本稿の最後にその部分を抜粋しご紹介したい。

“春まだ浅い二月末日、念願かなって蘇州の寒山寺に詣でることが出来た。例の「月落ち烏啼き・・・」の寒山寺である。水の都蘇州の郊外に、樹木に囲まれた静かな村に、このお寺はひそやかに建立されている。広い境内には亭が点在し、庭園内は小石を幾何学的模様に、敷き詰められた遊歩道が、縫うように続いている。一部破損した箇所も見られる。お寺や亭の古びているのは歴史を偲ばせてよいのだが、実をいうと私は失望した。想像していたより小さな古寺である。張

継の楓橋夜泊の詩があまりにも有名なので、私の空想



寒山寺入口近くを流れる運河に架かる石橋のたもとで

が大き過ぎた為かも知れない。

一枚のかなり大きい黒ミカゲ石に、この楓橋夜泊の詩が刻まれている。この詩の鐘声の「鐘」の字がうすく刻まれている。私も記念にと拓本を買ってきたが、やはり「鐘」の字が薄い。何故だろう。気になって仕方ない。張継がその時どんな心の憂さがあったのか、わからないが、涙で「鐘」の字が薄くなったのだと、私なりに解釈してみる。旅先の船上での一夜、詩人張継の心境を想像してみるのも面白い。詩は張継の詠んだものであるけれど、書は後年清末の学者愈越が書いたもので、「鐘」の字が涙で薄くなったものとの関係はない。今でも私はなぜ「鐘」の字が薄く書かれているのだろうと、気になって仕方ない。とにかく寒山寺はこの詩によって、蘇州の名所になった。蘇州の方達ばかりではなく、広く遠くからまで詣でるようになった”。

寒山寺は、中華人民共和国成立(1949年)後、2度に渡り大改修があったそうだが、二人の印象が

異なるのはその辺にあるのかもしれない。 (続く)



筆者撮影



聽鐘石(中国「百度」より転載)